

東海派の流水文銅鐸の新資料

難波 洋三

1. はじめに

梅原末治が長年にわたって収集・作成した大量の銅鐸関係の資料や記録は、現在、公益財団法人東洋文庫の所蔵となっているが、2021年春からWeb上で閲覧できるようになり、私もその全貌を初めて知った。その中には、これまでほとんど知られていない銅鐸に関する資料もある。本稿で紹介するのは、そのような資料のうち、スウェーデン・イエーテボリ博物館蔵の出土不明銅鐸に関する記録と拓本である（註1）。

この出土不明イエーテボリ博物館蔵鐸は、大阪府茨木市東奈良遺跡で製作された外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸と、三遠式銅鐸の祖型となった東海派の銅鐸の関係をこれまで以上に明確にしてくれる点と、東海派の流水文銅鐸が既知の例に先立って作られていたことを示す点で、非常に興味深いものである。

梅原は、1928年9月29日にこの銅鐸を実見調査して記録を作成し、採拓もおこなった（図1・2）。その後、1951年5月11日になり、調査時の記録を整理するとともに、復原図を作成し、各部分の寸法なども記入している（図3）。なお、これらの資料の整理番号は、拓本がNY-1316 4550とNY-1316 4546、復原図と記録がNY-1316 4547a・bである。

2. 梅原の記録

以下、銅鐸の全面の拓本が残る面をA面（図1）、一部分の拓本のみが残る面をB面（図2）とする。両面とも、身の主文様は二区流水文である。梅原が記したように、この銅鐸は、出土後に下半と鈕を切断除去し、残った身の上半の型持孔を埋めて、花器に改変している。

中国宋時代には、新興の士大夫階級が、彼らが理想国家とみなしていた周王朝の祭祀や儀礼において重要な役割を果たしていた青銅彝器に対し強い関心を持つようになり、それらの形や文様を写した青銅製品や陶磁器などが多数製作された。こ

の流行は朝鮮半島や日本へも波及し、鎌倉～室町時代にはこのような倣古の青銅製品が、陶磁器・漆器・書画など各種の唐物とともに中国から輸入され、室町時代になると茶の湯に取り入れられて「胡銅花入」などとして珍重されることとなった。日本出土の青銅器である銅鐸の、花入をはじめとする茶道具への転用は、この茶の湯における唐物の胡銅器の珍重に起源があり、江戸時代に広くなされた（難波2006・2011b）。本稿で紹介する出土不明イエーテボリ博物館蔵鐸も、江戸時代に出土し、花入に改変されたのであろう。

なお、この銅鐸のA面の拓本を見ると、身の上縁の鋸歯文を飾る横帯の上部が残っていない（図1）。舞面を切除して別に用意した銅板などで底を作った可能性が高い。

梅原の記録によると、残存部の高さは6.8寸（20.6cm）である。現存部上端の身の長径は4.4寸（13.3cm）、短径は4寸（12.1cm）で、扁平度（短径÷長径×100%）は91.0%、現存部下端の身の長径は5.6寸（17.0cm）、短径は5.2寸（15.8cm）で、扁平度は92.9%であり、身の横断面は丸みが強く円形に近いことがわかる。

鰭幅は、A面左鰭の上位の飾耳の間で6分（1.8cm）、A面左鰭下部で6分（1.8cm）であり、A面身の上左の型持孔の上下幅は5分（1.5cm）である。また、身は、厚さが7厘（2.1mm）内外と薄い。

梅原は、錆や腐食の状態が両面で異なることを指摘し、これを根拠として、この銅鐸はB面を上にしてほぼ鰭が水平の状態で埋納されていたと推定している。また、緑錆と腐食が目立つことから、この銅鐸の錫濃度は低いと考えられる。

梅原は、この銅鐸の本来の全高を1尺5寸（45.5cm）内外と復原している。後述するように、出土不明イエーテボリ博物館蔵鐸は扁平鈕式新段階あるいは突線鈕1式の東海派に属すると考えられるが、全高46cm前後の東海派の銅鐸の舞長径は、現高46.9cmの伝兵庫県淡路川出土鐸（扁

平鈕式新段階、東海派A1類)が14.65cm、全高46.3cmの愛知県朝日鐸(突線鈕1式、東海派B類)が現状で15.0cm、現高46.4cmの出土地不明京都国立博物館蔵鐸(突線鈕1式、東海派C類)が14.6cmである。これに対し、全高38.8cmの大阪府信達鐸(扁平鈕式新段階、東海派A1類)の舞長径は12.7cmである。出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸の舞長径は13.3cmなので、これらの例を勘案すれば、この銅鐸の全高は梅原の推定値よりも少し小さい可能性が高い。梅原の復原図(図3)は、下辺横帯の上下幅が東海派としては広すぎる。これらが影響して、全高の推定値が実際よりも大きくなったのであろう。

3. 銅鐸の特徴

以下、梅原の拓本から、この銅鐸の特徴を検討する。

(A面)

身の上縁には幅の狭い第1横帯があり、頂角を上にしたやや細長い鋸歯文を飾る。A面のこの横帯内の鋸歯文は、右端からR、L、L、Rである。これらより左の鋸歯文は、前記のように出土後の加工によって基部の一部しか残っていないため、鋸歯文RかLか判断が困難であるが、左部は鋸歯文Lを主体としているように見える。

上区には、複合縦型流水文12c5xを2連、左右に分けて飾る。2連の複合縦型流水文12c5xはx反転部を千鳥に配するが、左右の流水文でx反転部の位置は左右対称となっている。すなわち、右の複合縦型流水文12c5xのx反転部が、上から左、右、左、右、左寄りに位置するのに対し、左の複合縦型流水文12c5xのx反転部は、上から右、左、右、左、右寄りに位置する。また、2連の複合縦型流水文の最下段の直行部は、上下の条線を残してその間が平行斜線文Rとなっている。この流水文の直行部を平行斜線文に変える特異な特徴は、後述するように突線鈕1式東海派C類の出土地不明辰馬409鐸(図4・5)の流水文に受け継がれる。

上区の流水文は条線の迷路化が目立つが、迷路派流水文銅鐸に比べると迷路化の程度は軽微である(註2)。

上区と下区の流水文の間には、第2横帯がある。第2横帯の上下幅は、拓本から計測すると約3.4

cmである。第2横帯の上と中央には横界線があり、横帯の上半には連続渦文Zを、横帯の下半には連続渦文Sを、それぞれ飾る。いずれの連続渦文も渦巻の中心で単位文の端が繋がっていない第1種であるが、渦巻の巻き数は一定ではなく、描線の一部には不手際がある。

下区には、上区と同様に複合縦型流水文を2連、左右に飾る。ただし、下区の複合縦型流水文は上区のそれとは異なり、x反転部が縦1列に並んでいる。このx反転部の位置を決めるための縦の細かい割付線が、x反転部中央に残っている。また、左右の複合縦型流水文の最上段の直行部は、上1条と下2条を残して、その間が平行斜線文Rとなっており、上区の流水文の最下段の平行斜線文Rと併せて、第2横帯の上と下に平行斜線文を配する形となっている。

鰭には、まず鰭を貫く脚を伴う半円形飾耳を割り付け、その後、飾耳の間に鋸歯文を配する。飾耳は、鰭の上中下位に3対あったのであろう。飾耳の脚は、それぞれの半円形の突出部について3条ずつある。すなわち、突出部の輪郭から続く脚のほかにも、その間にも条線を1条書き加えている。飾耳の脚の線の太さは、文様の線の太さと変わらない。飾耳の突出部の縁は、斜面をなして外ほど薄くなる古い特徴を有する。

この銅鐸に輪郭線があったかなかったかは、拓本では明確でない。しかし、鰭の輪郭線に続くと思われる線が飾耳を切っているようであり、また、3条の飾耳の脚のうち中央の1条は、この線から外へは伸びていない。これらの特徴から、この銅鐸には細線1条からなる外周輪郭線があった可能性が高い。

A面の左右の鰭の、上と中の飾耳の間の鋸歯文数は共に5である。残存している鰭鋸歯文は、すべてRとLの交互配列となっている。なお、左右鰭の中位の飾耳の下には、鋸歯文を割り付けた際に生じた余白を埋めるために刻したとみられる斜線があるので、鰭鋸歯文は裾側から鈕側へと割り付けたのであろう。

身の上半の型持孔は、出土後の花器への改変に伴って埋められているが、その上下位置はA面の右が上区のほぼ中央付近、左が上区の中央よりもやや下であったことを確認できる。

(B面)

B面の拓本は文様が不明瞭であり、梅原が記したようにA面よりもB面の残存状態が悪いことをうかがえる。そのためか、梅原はB面については一部分の拓本しか作成しておらず、全体の文様構成を確認できない。

この拓本によると、身の上縁にはA面同様に頂角を上にした鋸歯文を飾る第1横帯があり、確認できる範囲では鋸歯文RとLの交互配列となっている。上区の流水文のx反転部は千鳥配置である。A面とは異なり、上区と下区の流水文の間の第2横帯には、1列の連続渦文Zのみを飾る。B面の第2横帯の上下幅は、A面のそれよりも狭い。不鮮明であるが、下区の流水文の最上段の直行部には、A面と同じく平行斜線文Rを飾るようである。なお、梅原の復原図では、この面の上区の流水文の最下段にも平行斜線文Rを飾る。

4. 銅鐸の位置づけ

出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、身と鰭の下部や鈕が出土後に切除されて残っていないため、その型式は残存部の特徴から推定せざるを得ない。

前記のように、この銅鐸は薄手で、身の厚さが7厘(2.1mm)程度しかないので、土製鋳型製であろう。すなわち、扁平鈕式新段階以後の銅鐸と推定できる。また、近畿式・三速式銅鐸が突線鈕2式で成立する前の銅鐸である。

この出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸のように複合縦型流水文を上下2区に飾る銅鐸は、突線鈕1式の東海派C類である出土地不明辰馬409鐸を除き、すべて外縁付鈕1式末から外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸である。外縁付鈕1式末から外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸は石製鋳型製で、同じ鋳型をくり返し使って同範銅鐸を作ったため、範傷や鋳型の鰭の付け根の破損などが目立つ例が多い。しかし、この銅鐸には、範傷、鋳型の鰭の付け根の破損はみられない。また、石製鋳型で鋳造した銅鐸は、土製鋳型で鋳造した銅鐸に比して、厚さが不均一で湯回り不良が目立ち、皸、孔、ヒケの凹などが多く確認できる。しかし、この出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸には、これらの鋳造欠陥はほぼないようである。以上の点も、出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸が土製鋳型製であることを示唆している。

前記のように、A面下区の左右の流水文の縦1列に並んだx反転部の中央には、x反転部の位置を決めるために刻された割付線が薄く残っているが、類似の縦の割付線は、突線鈕1式の迷路派流水文銅鐸やその祖型である扁平鈕式新段階末の鳥取県高住鐸の流水文にもある。これらの流水文の割付線やA面第2横帯を上下に分割する細かい線は、ためらいなく一気に引かれており、鋳型素材は比較的軟質であったと推定できる。これも、この銅鐸の鋳型が土製であることを示しているであろう。

外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸の飾耳の脚は、基本的に文様の線や界線よりもずっと太いが(註3)、出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、扁平鈕式新段階や突線鈕1式の東海派の銅鐸と同じく、鰭飾耳の脚が文様の線や界線と大差ない太さである。また、この銅鐸の身の扁平度は、残存部上端で91.0%、下端で92.9%と、共に90%を上回っている。外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸には、身の横断面の丸みがこれほど強い例はないのに対し、東海派のうち、大阪府信達鐸(扁平鈕式新段階、東海派A1類)は舞の扁平度が85.8%、出土地不明辰馬409鐸(突線鈕1式、東海派C類)は舞の扁平度がA面で86.1%、B面で85.6%と、この銅鐸と同じく身の横断面の丸みが強い。これらの点も、この銅鐸の位置づけを考えるうえで参考となる。

この出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸が土製鋳型製の銅鐸、すなわち扁平鈕式新段階以降の銅鐸とすれば、複合縦型流水文を身に飾る点、身の上縁に横帯があり頂角を上に向けた鋸歯文を飾る点、鰭の鋸歯文がRとLの交互配列である点、鰭に飾耳が3対あり突出部は端ほど薄くなる古い特徴を有する点、各々の飾耳の3条の脚のうち中央の1条は突出部に及んでいない点(註4)などから、出土地不明辰馬409鐸と同じく東海派に属すると推定できる。

東海派の銅鐸は、突線鈕1式のC類になると外周輪郭線が突線2条と細線1条の組み合わせとなるので、外周突線を有しないこの銅鐸は、C類よりも古い東海派である。扁平鈕式新段階の東海派の銅鐸には、外周輪郭の細線がないA1類とこれがあるA2類があり、A2類が後出と考えられる(難波2005)。また、突線鈕1式の東海派C類や

D類の外周突線は飾耳を必ず切っており、外周突線がまだないB類の愛知県朝日鐸でも、輪郭線の細線は飾耳を切っている。扁平鈕式新段階の東海派においても、外周輪郭に細線があるA2類の岐阜県上呂2号鐸では外周輪郭線が飾耳を切っている。よって、腐食や破損を受けやすい鈕や緒の周縁で外周輪郭線の有無の確認が困難な例でも、緒飾耳を切る線があれば、外周輪郭線を有したと推定できる。これに対し、飾耳を切る線がない、大阪府信達鐸、滋賀県山面1号鐸、伝兵庫県淡路川出土鐸には、外周輪郭線はなかったと考えられる。前記のように、出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、輪郭線の有無が拓本では明確でないが、輪郭線に続くと考えられる細線1条が飾耳を切っているようであり、本来、細線1条の外周輪郭線があった可能性が高い。そうとすれば、この銅鐸は、扁平鈕式新段階末の東海派A2類あるいは突線鈕1式初頭の東海派B類に比定できるが、この点について拓本でしか検討できない現状では、東海派A類あるいはB類としておくのが無難であろう。

東海派の銅鐸は、大きさ、文様などが同時期の他の銅鐸群に比して多様である。すなわち、六区袈裟襷文銅鐸を主体としながらも、突線鈕式になっても四区袈裟襷文銅鐸や流水文銅鐸を少数製作している。大きさも、扁平鈕式新段階には全高約32cm、約38cm、約47cmと大小の銅鐸が混在しており、突線鈕1式になると全高約40cm、約46cm、約52cmと大型品が主体となるが、東海派C類とD類にもまだ全高35cm程度の小型品がある(註5)。佐原真がこれらの銅鐸を「群」とは認定せずに「派」としたのも(佐原1964・1979)、東海派の銅鐸のこのような多様性を意識してのことと考えられる。

しかし、同じ工人集団が製作した銅鐸であっても、扁平鈕式古段階の石井谷型や突線鈕1式の大福型のように、個体差が小さい銅鐸群がある一方で、外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸や扁平鈕式新段階から突線鈕2式の横帯分割型のように、多様な銅鐸からなる銅鐸群もある。扁平鈕式新段階から突線鈕1式の東海派は、後者の1例とできよう。製作工人集団やそれが属する地域集団が銅鐸を求めるものや、銅鐸の社会的なありように地域差があり、それが製作する銅鐸の装飾や大きさなどに多様性を許容するかないか、すなわち許容しう

る揺らぎの程度が大きい小さいかの差異にも影響したのであろう。銅鐸の装飾や大きさなどに多様性を認める工人集団の作った銅鐸では、両面の文様の差異が顕著となることも多いと考えられ、一方、多様性を認めない工人集団の作った銅鐸では、両面の文様の差異は必然的に小さくなる。銅鐸の両面の文様の差異を短絡的に役割の二面性と結び付けるような議論は危険であり、このような観点からの検討も重要となろう。

突線鈕1式の東海派C類に属する出土地不明辰馬409鐸(図4・5)は、これまで知られていた東海派の中で唯一の流水文銅鐸であり、また、流水文の直行部を平行斜線文に置き換えるという他に例のない極めて特異な特徴を有する銅鐸であった。私は、この銅鐸の、複合縦型流水文を飾る点、身の上縁に横帯があり頂角を上に向けた鋸歯文をこれに飾る点などを、外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸から受け継いだ特徴と考え、東海派の袈裟襷文銅鐸の特徴の検討も加えて、東海派が摂津で作られた外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸や3対耳四区袈裟襷文銅鐸を祖型とする銅鐸群であることを示した(難波2002・2011a)。出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、外周突線がないことから明らかに出土地不明辰馬409鐸よりも製作が古く、これまで特異性が目立っていた出土地不明辰馬409鐸の位置づけを再考するうえで非常に重要な資料である。

出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、A面上区に2連の複合縦型流水文を左右に並べて飾っており、A面下区やB面の流水文の構成も同様であったと考えられる。外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸には、兵庫県気比3号鐸や東奈良第1号流水文銅鐸鋳型といった四区流水文銅鐸(B1類、B2類)と、これが変化した、横並びの2連の複合縦型流水文を上端でつないだ特殊な流水文を上下二区にそれぞれ飾る大阪府恩智垣内山鐸およびその同範銅鐸(C類)がある(難波1991)。出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸の流水文の型と2連の複合縦型流水文を左右に並べて飾る構成は、これらの外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸B類やC類と関係すると考えられる。

さらに、身の上縁に横帯を有するのも外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸と共通する特徴であり、この横帯に頂角を上にした鋸歯文を飾る点も、外縁

付鈕2式の縦型流水文銅鐸の多くと共通する（註6）。また、前記の出土地不明辰馬409鐸にも、この銅鐸と同じく身の上縁に上下幅の狭い横帯があり、やはり頂角を上にした鋸歯文をこれに飾る。

前記のように、出土地不明辰馬409鐸の特異な特徴の一つは、流水文の直行部を平行斜線文に置き換えていることである（図4・5）。他に例のないこの特異な特徴の由来については、これまで不明であったが、出土地不明イエーテボリ博物館蔵鐸によって、これを以下のように推定することが可能となった。

出土地不明辰馬409鐸の流水文の反転部はC反転で、5条ほどの弧線からなる。流水文の直行部は、上下に1～3条を残してその間に平行斜線文を充填するが、隣接する段の平行斜線文の方向を変えているため、全体として複数条の軸線を持つ綾杉文を千鳥に配したように見える。ただし、B面上区の流水文は5・6段目の直行部の平行斜線文がRに揃っており、下区の流水文は、4～6段目の直行部の平行斜線文がL、7・8段目の直行部およびその下の横帯の平行斜線文がRに揃っているため、これらの箇所は綾杉文になっていない。

一方、出土地不明イエーテボリ博物館蔵鐸では上区の流水文の最下段と下区の流水文の最上段の直行部のみ出土地不明辰馬409鐸のそれに似た平行斜線文に置き換えており、あたかも第2横帯の上下を平行斜線文で縁取りしたようになっている。おそらく、第2横帯を強調するために、平行斜線文でこれを縁取りするという新たな装飾を思いついたのであろう。そして、出土地不明辰馬409鐸では、この平行斜線文をさらに流水文の他の直行部にも飾るようにしたと考えられる。このように、出土地不明イエーテボリ博物館蔵鐸を紹介することで、出土地不明辰馬409鐸の特異な流水文の出現過程を説明できるようになった。

東海派の流水文銅鐸は、これまで突線鈕1式東海派C類の出土地不明辰馬409鐸しか知られていなかった。しかし、出土地不明イエーテボリ博物館蔵鐸の存在が明らかになったことで、東海派では扁平鈕式新段階のA類あるいは突線鈕1式初頭のB類の段階にも流水文銅鐸が存在したことが判明し、東海派において縦型流水文を身に飾る銅鐸が少数ながら継続的に作られていたことが明らかとなった。また、東海派の祖型の一つが東奈良遺

跡で製作された外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸であることも、従来よりも明確となり、すでに発表している私説を補強できたのではないかと考える。（外縁付鈕1式末～外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸と3対耳四区袈裟襷文銅鐸）→（扁平鈕式古段階の山面2号鐸型）→（扁平鈕式新段階～突線鈕1式の東海派）という、三遠式銅鐸の成立に至るまでの摂津系の銅鐸製作工人集団の動向を考えるうえで、以上のように出土地不明イエーテボリ博物館蔵鐸は非常に重要な銅鐸である。

なお、本稿は、科学研究費助成事業 基盤研究（B） 研究代表者 難波洋三「松帆銅鐸の発見を契機とする銅鐸論の再構築」（課題番号18H00751）の成果の一部である。また、公益財団法人東洋文庫からは梅原考古資料の、公益財団法人辰馬考古資料館からは所蔵銅鐸の拓本の、転載許可を得た。

註

1) この銅鐸は、梅原末治が1933年に発表した『銅鐸の研究』出版以後発見の銅鐸一覧表」（梅原1933）に「瑞典ゲーテボルグ博物館藏品（Göteborg Museum, Sweden）」と記載されている流水文銅鐸（身の破片）であるが、これまでその詳細は不明であった。なお、現在、スウェーデンには、梅原が記したゲーテボルグ博物館（Göteborg Museum）すなわちイエーテボリ博物館という名称の博物館は存在しない。イエーテボリの博物館・美術館は、梅原の調査以後に統合・分割がなされ、館名が変わるとともに所蔵品も移動しているようであり、この銅鐸はGöteborgs konstmuseum、Göteborgs stadsmuseumをはじめとする市内のいずれかの博物館・美術館の所蔵品になっている可能性が高いが、現在の所在は確認できなかった。

2) 佐原真は、銅鐸分布圏西部で出土する扁平鈕式以降の銅鐸の流水文は迷路化が顕著であると指摘し（佐原1960）、この流水文を「西型銅鐸流水文」（佐原1964）、「西の銅鐸流水紋」（佐原1972）、「迷路派流水文」（佐原1979）などと呼んだ。しかし、実際には流水文の迷路化は、外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸においてすでに顕著である（難波1991）。土器に楕状の施文具で描かれた流水文を、銅鐸の鋳型に1本ずつ刻するようになり、同じ外縁付鈕2式でも、横型流水文銅鐸に比して流水文に対するこだわりが弱かった縦型流

水文銅鐸では、描法の弛緩が早く始まったと考えられる。後述するように、本稿で紹介する出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸は、外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸を祖型としており、流水文が迷路化している点は、外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸の特徴を受け継いだのであろう。

3) 現存する3組7個の外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸、外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸B2類の石製鋳型である東奈良第1号流水文銅鐸鋳型は、いずれも鱗に3対の飾耳があり、飾耳の脚は文様や界線よりも目立って太い。現存最古の縦型流水文銅鐸である伝滋賀県出土辰馬407鐸も、本来、鱗に3対の飾耳があり(難波1991・2011a)、そのうちA面左鱗の中位と下位の飾耳には鱗を貫く脚があるが、これらの脚の線は細く、鱗鋸歯文の線と変わらない太さである。

4) 東海派銅鐸では、脚が多条化した例でも、この出土地不明イェーテボリ博物館蔵鐸と同じく脚は突出部に及ばない。なお、東海派のうち、C類の出土地不明京都国立博物館蔵鐸、出土地不明辰馬409鐸(図4・5)、出土地不明重要美術品考古101鐸(『日本原始美術大系』4 鐸劍鏡 1977 のカラー図版16)の3個は、鱗の脚の間に有軸綾杉文を飾るが、いずれも右鱗の綾杉文はD、左鱗の綾杉文はCで、綾杉文は外周突線に伴う細線を切るが、外周突線に切られている。これらの細部の特徴までも共通することからも、この3個の東海派の流水文銅鐸と袈裟襷文銅鐸は同じ工人集団の製品と考えてよいであろう。

5) 三遠1式の出土地不明岡山県立博物館蔵鐸は、身の片面は通常通り六区袈裟襷文であるが反対面は四区袈裟襷文であり、全高も39.5cmしかない。成立直後の三遠式には、東海派の前記のような特徴を色濃く残したものがまだあったことがわかる。

6) 具体的には、外縁付鈕2式の縦型流水文銅鐸のうち、大阪府桜塚鐸とその同范銅鐸、兵庫県気比3号鐸、東奈良第1号流水文銅鐸鋳型が、身の上縁の横帯に頂角を上に向けた鋸歯文を飾っている。

参考文献 (五十音順)

- 梅原末治 1933 『銅鐸の研究』 出版以後発見の銅鐸一覽表』 『考古学雑誌』 第23巻第4号 pp. 29-32
佐原真 1960 「銅鐸の鋳造」 『世界考古学大系』 第2巻 日本Ⅱ 弥生時代 平凡社 pp. 92-104
佐原真 1964 「銅鐸」 『日本原始美術』 4 青銅器 講談社 pp. 135-144

佐原真 1972 「流水紋」 『日本の文様』 8 水 光琳社 出版 pp. 9-24

佐原真 1979 『銅鐸』 日本の原始美術7 講談社

難波洋三 1986 「銅鐸」 『弥生文化の研究』 6 道具と技術Ⅱ 雄山閣出版 pp. 132-145

難波洋三 1991 「同范銅鐸2例」 『辰馬考古資料館考古学研究紀要』 2 辰馬考古資料館 pp. 57-109

難波洋三 2002 「八王子銅鐸の位置づけ」 『銅鐸から描く弥生時代』 学生社 pp. 74-96 (難波洋三 2001 「八王子銅鐸の位置づけ」 『市制80周年記念シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」 予稿集』 一宮市博物館 pp. 69-76 に加筆)

難波洋三 2005 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸—最終段階の銅鐸の動向—」 『平成17年度文化財講座資料集 魏志倭人伝の世界』 大阪府文化財センター pp. 99-116

難波洋三 2006 「花入れなどに転用された銅鐸」 『京都国立博物館だより』 149

難波洋三 2007 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸—その成立と展開—」 『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』 平成15年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書 pp. 1-49

難波洋三 2011a 「銅鐸群の変遷」 『豊饒をもたらす響き銅鐸』 大阪府立弥生文化博物館図録45 大阪府立弥生文化博物館 pp. 80-109

難波洋三 2011b 「銅鐸、花器として生きる」 『古代はいまよみがえる平城京』 クバプロ pp. 175-193

難波洋三 2018 「出土地不明笹野家旧蔵一号鐸と横帯分割型銅鐸」 『学叢』 第40号 京都国立博物館 pp. 97-119

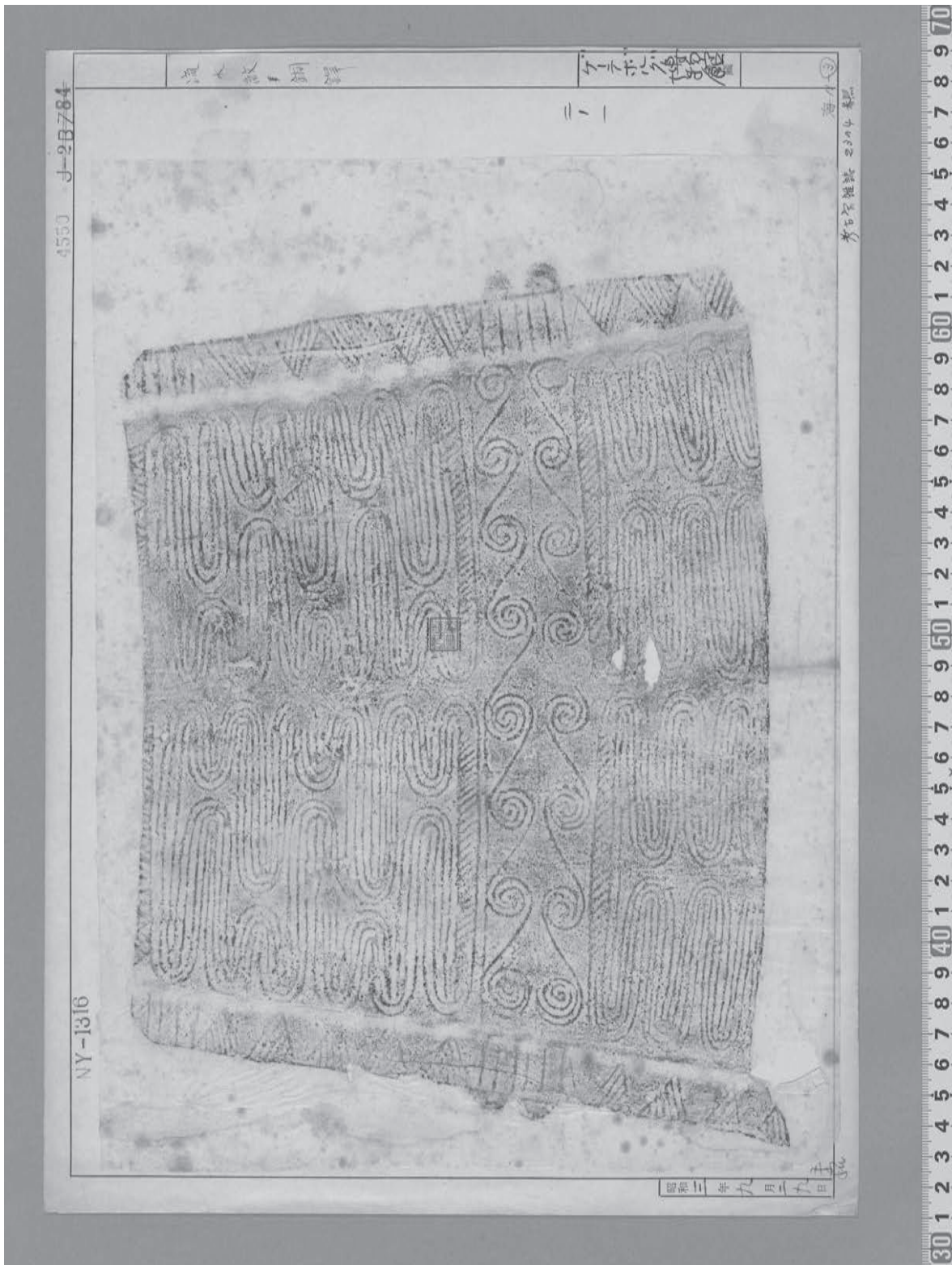


図1 出土地不明イエーテボリ博物館蔵鏡A面の拓本（東洋文庫所蔵 梅原考古資料NY-1316 4550）

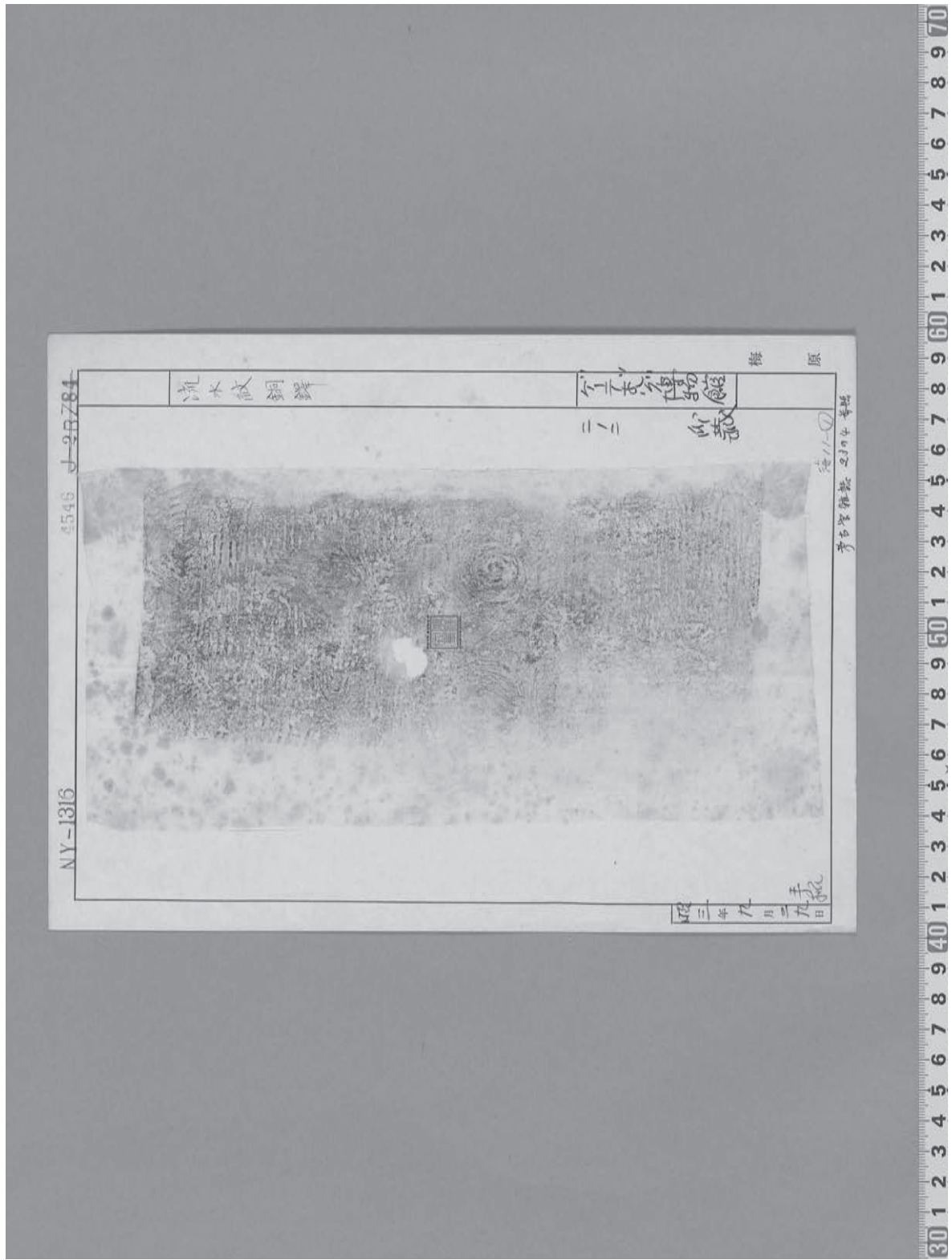


図2 出土地不明イエーテポリ博物館蔵鐸白面の拓本（東洋文庫所蔵 梅原考古資料 NY-1316 4546）



図4 出土地不明辰馬409鐸A面の拓本（辰馬考古資料館所蔵）



図5 出土地不明辰馬409鐸B面の拓本（辰馬考古資料館所蔵）